

読書に関するエッセー 入賞作品集 2019

《小学生の部》最優秀賞

犬たちをおくる日

—この命、灰になるために生まれてきたんじゃない

桜台小学校 六年

細川 奨 真

約十年前、愛媛県動物愛護センターには、毎日沢山の数の犬や猫が送られていたようです。その実態はとてひどいものでした。ペットとして飼っていた犬を「バカだからいらない」を理由にして、自分の身勝手から連れて来る人。また、妊娠手術代にお金がかかるからと繁殖してしまった犬を連れて来る人、また人間の都合で山や海岸に捨てられてしまった犬や猫達です。このセンターで収容された半数近くが子犬だったそうです。動物愛護センターでは「モデル犬」といって保護される子犬や猫がわずかにいました。保護された子犬達はきれいにされ、譲渡会に出されました。譲渡会用の子犬を選ぶ大きな目安は第一が健康。そして性格が人懐っこい事でした。選ばれなかった子犬と成犬は一週間の期間をセンターで過ごし、殺処分されていたのです。実態を知ると心が痛くなります。

で、一年間で百万円くらいかかっていったそうです。もし保護するならば一年後には四千頭のエサ代が必要になります。犬が十年間生きるとして、どんなふくれ上がつていきます。エサ代は税金から払われるものの、犬の散歩等、様々な問題が出て来たようです。センターに送られて来た犬達は、人間に何の疑いもないままざしで一週間待ち続けたそうです。殺処分までの一週間は犬達にとって快適に過ごせるように職員の方達の努力で室内はきれいに保たれ、えさは均等に渡るように、また犬の性格を見て部屋分けされるなど、職員の人がせめてもの最後に来る気遣いをしていたそうです。最後は管理棟という所で長く苦しまないよう二酸化炭素を部屋に充満させられて、最期を迎えるようです。

平成二十年十月以降、愛媛県動物愛護センターでの直接引き取りはしなくなったようですが、現在でもセンター内には「やすらぎ」と刻まれた動物慰霊碑が建っています。人間のエゴと無責任な行動の果てに奪われた沢山の命の叫びがここに宿っています。

現在の全国の年間殺処分数は犬一・六万頭、猫六・七万頭です。過去十年間の推移を見ると殺処分数は三分の一以上に減少しています。「殺処分ゼロ」ではなく、「捨てられる命ゼロ」になる為に。一度引き取った命は、命が終わるまで責任を持つ。出来れば、「その命を幸せにする」という事まで考えてほしい。命の大切さをこの一冊を通じてもっと分かっていると思います。僕の家は犬を飼っています。ペットショップで、「僕が欲しい」と両親にお願いしました。名前は「もな」と言います。もなが色だからです。世話は大変に思う時もあるけれど、犬からもらう元気とか、心の安らぎもあつたりします。僕は犬と暮らせて幸せです。もなの命がある限り、僕は最後まで大切に飼いたいと思います。

《小学生の部》優秀賞

わすれられないおくりもの

常磐西小学校 六年

片野 拓 実

ぼくが心に残った感動の一冊は、『わすれられないおくりもの』という本で、この本は死を扱ったものです。この本の中で、かしこいいつもみんなに頼りにされていたアナグマは、ある日年をとって死んでしまいました。森に住んでいるアナグマの仲間達はアナグマの死で悲しみに打ちひしがれ、これからどうしたらよいかと途方にくれま

す。でも、アナグマの仲間達は長い時間と共にお互いにアナグマとの思い出を語り合い始めました。そうすることにより、悲しみがうすらいでいき、そのうちアナグマの話が出る度にいつも楽しい思い出を話すことができるようになったというのです。ぼくがこの本を初めて読んだのは小学二年生ぐらいの時でした。ただ、そのときは特に何も印象に残りませんでした。でも、よく年の秋に母方の祖父が病気で亡くなり、その後の経験を通してこの本への感じ方がとても変わりました。

長い間病氣とたたかい長くは生きられないことも知っていました。亡くなった当時も、一大事が起きたと受けとめていました。が、ただなみだが止まらず悲しいと思うだけで、その時には死についてよく分かりませんでした。それから、おそう式、お参りなど様々な行事をこなした家族で泣いたり、悲しんだりする中で祖父の思い出話をよくしてきました。

あれから三年経った今では、祖父の話は笑い話の中でよく出てきます。「よくオナラしたよな」とか「散歩好きやったよな」とか、昔は祖父のことを思い出すと悲しくなっていたのに、今ではなに気ない思い出でも、楽しい、なつかしい思い出

出として話すことができるようになりました。笑いながら祖父の話を家族でしている時、ぼくはこの本に書かれていた事はこういうことなのかなと実感しました。悲しい思い出は、一人がかかえているとつらいです。でも、みんなで語り合えば時間はかかるけどいい思い出になったり、いつの間にか悲しさがやわらいで悲しまずにその人の話ができたりします。そんな実体験を通して、また亡くなった人のことをいつまでも悲しんでいないで亡くなった人が残してくれた思い出を大切にしていこう。本が伝えて進んでいくというこの本が伝えたいことを感じたので、ぼくにとって心に残る感動の一冊となりました。

《小学生の部》優秀賞

ちからをあわせよう

海蔵小学校 一年

佐野 雫

わたしは、みんながちからをあわせてがんばることがいいなとおもいました。わたしもちからをあわせることが好きです。このほんは、ねこが空をさわってみたいとおもうおはなしです。わたしは、ねこは空に

ぜったいにとどかないとおもいました。このほんはよこにひらくのではなくてたてにひらくほんです。こねこはそらをさわってみたいなとおもってかめさんのせな

かにのせてもらったり、きつねさんにたのんだりします。たくさんのおうぶつにつづいてもいいです。でもなかなかとどきませんでした。わたしは、ねこだからぜったいにとどかないとおもいました。

わたしがすきなところは、ねこがぞうにつづだつてといったところ。一ばん下にはかばさんがいて、もう一つ上はくまさんで、その上はこぶたさんで、その上はきつねさんで、その上はかめで、その上はこねこです。それでも空にはぜんぜんとききません。

ぞうさんがつづだつてくれたらとどくかもしれないとおもいました。それは、ぞうさんが大きいからです。

つぎにわたしがすきなところは、ねこが「とどいたぞー！」

というところ。みんなの一ばんしたにぞうさんがはいりました。わたしのおもったとおりでした。とつてもたかくなつて空にてがとどいたのだとおもいます。ねこがせのびしているのがかわいかったです。

わたしもせのびをするときがあります。わたしは、まだ一ねんせいなのでつぼうにてがとどきません。そういうときわたしは、ジャンプするのとどきます。だからねこもジャンプすればいいのとおもいました。

さいごにすきなところは、ねこがかみなりさんをもどしたと

ころです。ねこが空にタツしたらかみなりがなつかみなりさんがふってきました。

なぜこがすきかというところ、かみなりさんがちゃんと空にもどつてくれたからです。どうぶつたちがかみなりさんをこわがっていたのもどつてくれてうれいします。

このあいだ、うんどうかいがありました。わたしは、一ねんせいは、ダンスをしました。パブリカというきよくにあわせて、みんなでおどりました。れんしゅうのときは、さいしよは

なかなかじょうずにおどれなくて、みんなたいへんそうでした。わたしもほんばんでちゃんとおどれるのかしんぱいしました。でも、みんなでいっしょうけんめいれんしゅうしたので、うんどうかいのひは、じょうずにおどることができました。

《小学生の部》優秀賞

独とくすぎる私の本の読み方

大谷台小学校 六年

藤田 萌生

私は小さいころから、一人で絵本や本をひまなときに読んでいた。私にはお兄ちゃんがいるので、本だに本がたかさん

あつたのだ。私は、小さいときから、本を読みだすと自分の世界に入ってしまう。いつしか本を読まない日はないくらい

になった。百ページほどの本はすぐに読み終わってしまう。今では、小説など、三百ページや四百ページぐらいないと手ごた

えがないので読まない。私が本を読むようになったのは、絵本のおかげだと思う。

私は、本を読むときに変な読み方をする。それは、かぎっこしか読まないこと。これを学校の友達に言ったら、みんなこ

う言うの。「えっ。それで話の内容がわかるの？」と。私には、この読み方のほうが本の内容がわかる気がする。